

## 人生二毛作推進県民会議（事例発表会）発表概要

日時 平成30年2月5日（月）午後1時30分～3時45分

場所 県庁議会棟4階404・405号会議室

### テーマ① 中山間地における高齢者の健康と地域づくり（南佐久郡南牧村）

#### ○内山二郎（公財）長野県長寿社会開発センター理事長（以下「内山理事長」）

発表に先立ちまして、今日は、第1のテーマの南牧村から、これを支えてくださっているシニアの住民の皆さんが大勢参加して下さっております。どうぞお立ちください。皆さん拍手をお願いします。

第1のテーマについて、これにかかわったコーディネーターの下倉さん、それから南牧村社協の松澤さん、そして南牧村住民課の市川さん、それから行き活き農村広場の実践者であります原寛さん、この4名の方で発表していただきたいと思います。

村の保健師である市川さん、どんなことからこれが立ち上がったのかをお願いします。

#### ○南牧村住民課 市川幸さん（以下「市川幸さん」）

では、ちょっと村の紹介も兼ねてさせていただきます。

場所は長野県の左端、山梨県との県境にあります。標高は1,000～1,500メートルと、高低差が大きい地域です。標高が高いために、今のような冬はマイナス20℃以下になることもあります。年間の平均気温も6.9度と低く、涼しい気候を生かして高原野菜が生産され、県下第2位の売上高を誇っています。皆さん、野辺山高原ですとか、あと酪農も盛んでして、シュッポップ牛乳を見たことがあるんじゃないかなと思います。

人口は約3,000人で高齢化率は32%、大体3人にお一人が高齢者ということになっています。仕事は約6割が自営業で、ほとんどの方が農家や酪農家です。

皆さん農業、酪農を生涯現役でやっていらっしゃるんですけども、ちょっと体調を崩したりして引退するとやるのがなかつたり、交通の便が悪くて、免許を返納してしまったりすると出かけるのが大変ということがあります。

私はこんな中で保健師として訪問させていただいているが、皆さん、社会資源が少ない中でも、とても工夫されて過ごされている人生の先輩方がたくさんいらっしゃる。介護予防教室で月に1回、集まるが、山のように差し入れを持ってきてくださる方ですとか、裁縫が得意で、みんなにティッシュケースなどを作ってくれる方ですとか、まだまだ、私から見たら出来ることがたくさんある。あと、軽度の認知症の方がお友だちについて、毎日、散歩に連れだして、さりげなく様子を伺いに行ってくれる方などもおられます。

せっかくこういった方たちがいるが、皆さんもう引退されて「自分たちは何もできない」とおっしゃる。こういった方たちが家でただじっとしているだけではもったいないというのをすごく感じた。それで、いつまでも元気でいきいきと人に感謝されることを大事にしていけるような事業を検討しました。

#### ○内山理事長

それがきっかけということですね。

○市川幸さん

生きがい、やりがい、働きがいを持ってできるために、ではどうすればいいかというところで、得意なことを活かして、いつまでも元気で過ごしてほしい。あと、男の人の参加を増やしたい。それと普段かかわることが少ない、子どもなどかかわれる機会を持ってほしいということで、事業を考えていきました。

では実際に、どんなことだったらみんな集まるかなということを話し合う中で、皆さん慣れ親しんだ、畑をやってみたらどうだろうということで、野菜をつくったり、つくった野菜を売ったりできたらいいんじゃないかと。あと食事参加者が一緒につくってはどうかと。

○内山理事長

具体的に活動がどう展開していったのですか。

○市川幸さん

ここでちょうど介護保険の改定もあつたりしたので、総合事業の一般高齢者の介護予防事業として、社協に委託し事業展開を行うということになりました。

○内山理事長

社協に委託してということですね。野菜をつくるという、農業から始まったということですね。それは具体的にどう展開しましたか。

○南牧村社会福祉協議会 松澤千恵さん（以下「松澤千恵さん」）

南牧村社協の松澤です。これまでの活動について私のほうからお話します。

昨年4月に始まった「行き活き農村広場」なんですが、対象者は村内に住む65歳以上の方で身の回りのことが自分でできる方、開催日は週2回10時から14時30分、費用は1回300円、希望者は送迎します。

○内山理事長

これは社協がやっているんですね。そして、ちょっとまた話がずれますけれども、松澤さんは農業といっても全然農業を知らないんですよ。全く知らない。

○松澤千恵さん

しかも料理が苦手で、どっちもだめな私がなぜか担当にさせていただいてしまって。

○内山理事長

知らないがゆえにという話を下倉コーディネーターが僕に一生懸命してくれましたが、それが何か逆に功を奏したというお話を。

○松澤千恵さん

広場の拠点となる建物は、JR小海線の野辺山駅の道を挟んだ駐車場の一角にある、観光案

内所の跡地を使用しています。

徐々に参加人数が増えにぎやかになり現在、登録活動をしているのは30名ほどで、毎回15人程度が参加し、多い日は20人を超えています。小さな建物いっぱいでわいわい活動しています。

お昼ご飯は、事前にメニューを相談し、スタッフと参加者の皆さんでつくっています。リクエストは季節のもの、畑でとれた野菜を利用して、いつもおいしくでき上がり、とても楽しい時間です。

広場から車で3分ほどのところの畑を借りています。4月に作りたい野菜、やりたい活動などのアンケートをとり、話し合ってつくる野菜を決めました。

5月、強風の中、経験を活かして何ごともないように豆まき、苗植えの作業を進める姿は本当に頼もしかったです。畑の看板もみんなで作りました。

夏も収穫に向けて、よいものがとれたら直売所に出荷しようと話し合い、にんじん、とうもろこし、かぼちゃなど、めでたく出荷にもこぎつけました。袋づめ、テープ巻き、値段づけまで工夫しながら行いました。

8月には、保育園の子供たちを招いて一緒にじゃがいもを収穫しました。子供たちが宝探しのようにはりついて楽しんでる姿に広場の皆さんもうれしそうでした。

11月にはおやきづくり交流会もできました。春、広場が始まったころ、本場のおやきを教わりたいたの一言から、コーディネーターの下倉さんが小川村社協につないでくださり、小川村のおやき名人の皆さんをお招きして、囲炉裏がある公民館を借りて、広場の皆さんはもちろん、地区の老人会、地元の特養の入所者の方、ボランティアの方も参加して、総勢48名で伝統のおやきづくりを教わりました。餡は広場の畑でとれた小豆と野菜です。気さくな名人の皆さんと楽しく、笑顔いっぱいの交流会になりました。

小学校の音楽会を見学に行ったのをきっかけに、学校の草とりボランティアに声をかけていただき広場の有志で参加しました。その際、3年生の担任の先生から子どもたちと交流できたらとのお話があり、9月と1月に2回交流会もできました。子どもたちが考えたゲームで遊んだり、広場の皆さんは歌を披露しました。子どもたちからは、おもちゃのプレゼントをいただき、そのお返しに手づくりの飾りを作って贈りました。

また、村の虫歯のない子の表彰の記念品として、写真たての製作の依頼を受けて、広場に参加している大工さんが中心になり、みんなでつくって当日引渡し、とても好評でした。12月には男性陣はしめ縄づくりにも挑戦しました。

月1回は体操を教わったり、季節ごとにお出かけもしました。冬のお出かけは、本日この会議に出席する機会をいただいたので、午前中、皆さんで善光寺をお参りしてまいりました。

## ○内山理事長

ここへ参加するのに合わせて、お出かけの企画だったんですね。

### ○松澤千恵さん

せっかくのいい機会なのでそうさせていただきます。

畑が終わったら冬は何をしつらいのだろうと心配していたのですが、思いのほか、その都度やりた  
いことが出てきて、大勢でそば打ちをしたり、クラフトテープのかごづくりなどに精を出しています。

1年目で初めてづくし、毎回、手探りではありましたが、参加者お一人お一人が前向きで、積極  
的で協力的で、予想以上にたくさんの活動ができ、よい絆が生まれ、たくさんの方とつながって交流  
ができました。

それまで南牧村の交流体験事業には男性の参加者は少なかったようですが、広場には男性の  
皆さんが多く参加し、支えてくださっています。メンバーに男性、女性が両方いて、地区を越えて集ま  
れていることが広場の魅力になっています。

これまで培ってきた農作業、料理、裁縫、木工など、それぞれの得意なことを発揮しながら、みん  
なで力を合わせて活動することがやりがい、励みになり、続けていく中で、保育園や小学校の子ども  
たちとの世代間交流、小川村の皆さんとの地域間交流ができたこともうれしい評価でした。

今後の課題として、送迎希望者が広範囲になった場合の足の確保、参加者の方の高齢化、新規メンバーの開拓などがありますが、これからも今の雰囲気を大切に活動を続けていきたいです。広  
場の皆さんの姿には、年を重ねながら生き生き活躍するヒントがあります。ぜひ一度、広場にお出か  
けください。お待ちしております。

### ○内山理事長

はい、ありがとうございました。

そして、原寛さん、原さんは今年、失礼ですが、お幾つでいらっしゃいますか。

### ○“行き活き農村広場”活動者 原寛さん（以下「原寛さん」）

80歳になりました。

### ○内山理事長

80歳になった。そしてこの広場を牽引していただいているそうですけれども、原さんはもともと、この  
南牧で農業をやってこられていますね。

### ○原寛さん

はい。特に野辺山というところは、戦後、開発された地区で開拓地なんです。そこへ親父と一緒に  
に、私はまだ小学生で、そのころ入植したわけです。親父のあとを継いで畑を耕し、お金になるような  
野菜をつかって、今日に至ってきました。おかげさまで全国的にも小海野菜、南佐久の南部の地区、  
川上も含めてですが、有名な産地となりました。やっぱり我々の農業魂で、現在の道を築いている  
んじゃないかと自負しています。

○内山理事長

ありがとうございます。そして、今日のテーマである行き活き農村広場、これは最初からかかわっていらしているんですね。

○原寛さん

市川さんから打診がありましてね、それはいいじゃないですかと。最近の老人は孤立してしまうんですよ。孤立はいけないね、健康のために、一番いけない状態なんです。

みんなが目的を持って、いろいろな活動をやったら孤立を防ぐ対策になると思い、私は市川さんの提案に賛成して、最初から参加しています。

○内山理事長

やってみてどうでしたか。

○原寛さん

本当に、皆さん、まだ技術的には本当にまだ先輩ですよ。まだ現役ですよ。

○内山理事長

やっぱり、現役を一旦退いてもまだまだいけるという感じがあったわけですね。そしてその孤立の問題なんかも保健師さんとしてお持ちになっていたと。

○市川幸さん

訪問で家を回って、皆さん、「もう年だからできない」と言われる方が多いんですが、若い人ではできないぐらいに、お漬物とかもたくさんつくっていますし、時間がかかるようなことも、手間ひまかけて一つ一つやっているところを見ると、家に籠ってしまっは非常にもったいないと感じます。

○内山理事長

ありがとうございます。ちょっとそろそろ時間になってきていますが、コーディネートした下倉さんはどんなふうにかかわって、皆さんの動きをどう見えていますか。

○下倉亮一シニア活動推進コーディネーター

今日ご参加の皆さんは、様々な事業をやられていると思うが、うまくいっているとはどういうことかと考えたときに、この南牧村の活動を考えてみたいと思うんです。

うまくいっているとは、参加者が主体的に活動している。それから企画のプロセスに参画している。畑で何をつくるかといったことを、みんなで話し合う参加者同士のコミュニケーションがある。オープンな関係づくりができたということが、住民の方々が参加する事業としては大切なものだと思います。

それから、思いを共有し、スタッフも参加者も同じ方向を向いて活動しているということ。元気な方もいれば、少し足腰の弱い方もいますけれども、それぞれの役割の中で同じ方向を向き、それを地域の方もシェアしているというのはとても大事ななというふうに思います。

また、計画どおりではないというところが、実はこの活動の肝で、社協の局長さんが、「意図しない活動がたくさん生まれてきた」ということをおっしゃっています。先ほど紹介のあった小川村との交流も、年度当初にはなかった話ですし、大体、今日、県庁にいること自体が奇跡のような活動であり、そういうものを受け入れていく体制があったということも、とても大事だと思う。

それから手段が目的化していない。例えば高齢者のサロンをやるというときに、何回やればいいのかという話になってしまうと、そこで話が止まってしまう。「何のためにやっている」ということを、企画する側も参加する側も皆さん承知し、企画側と参加者の互恵的な関係ができています。お互いさまで頼り、頼られる関係が相互にあることが、“行き活き農村広場”の特徴だというふうに思う。

それと、楽しく、かっこいいこと。世代間交流とか道の駅で売るとか、既成の概念にとらわれない、いろいろな活動を展開していくかっこよさというものがあると思う。

夢を語れるかいうのもまた大事なことで、何をつくるかとか、来年は何をするかとか、当事者自身が語れる場であるということは、とても大切である。

合意形成のプロセスが重視され、企画の段階から参加者がかかわって、考えを分かち合いながら、フットワーク軽く、トライアンドエラーでいろいろなことをやって、それが波紋のように広がり、ダイナミックな動きとなり、最後はうまくいっている。地域づくりの実践例として、とても学ぶべきところがある。

#### ○内山理事長

ありがとうございます。行政、社協、地域の住民、それから地域の子どもたちですね。それから遠く、地理的に離れた小川村の人たちまで交わって、“行き活き農村広場”が実践されているわけですね。皆さん、ありがとうございました。

## テーマ② 子ども応援ボランティア講座の協働（長野市）

### ○内山理事長

2つ目のテーマについて、まずシニア活動推進コーディネーターの齋藤さん、それから篠ノ井地区住民自治協議会地域福祉ワーカーの町田美紀さん。それから北信教育事務所生涯学習課指導主事の西澤慎治さんです。

それぞれのお立場でどういふふうにかかわったか、説明をお願いします。

### ○齋藤むつみシニア活動推進コーディネーター（以下「齋藤コーディネーター」）

きっかけからご説明します。

趣味で菊づくりや園芸のグループ活動をしている、あるシニア男性から、綿の苗がたくさんできたので、小学校へのおすそ分けしたいと、私に相談が持ちかけられました。

ただ、おすそ分けするだけではなく、「児童と一緒に植えてはどうか」とお誘いしましたら、快く引き受けてくださり、去年の夏、他のシニアの方とも協力して、長野市立篠ノ井西小学校の畑で、児童と一緒に綿の苗を植える活動を行うことができた。「毎朝、小学校の前を歩いて畑に行っていたが、学校で子どもたちと一緒に作業ができるなんて思ってもいなかった」と晴れやかな表情でおっしゃられた。

このことをきっかけに、教頭先生から、地域の方々に応援をしてもらいたいがなかなかつながり方がわからないと、私に相談をいただいた。

地域ぐるみで子どもたちを育てる、信州型コミュニティスクールが県内の学校でも始まっているが、学校現場では、どこへ協力を求めればよいのか具体的なイメージが持てずに悩んでいるという現状が見えてきた。

私はこれまでの取組から、子どもたちの役に立ちたいと考えるシニア世代が多いと感じていたので、この双方が何らかの形で出会い、それぞれの思いを交わすことができれば、うまくいくと考えた。

そこで、地域の情報が集まる篠ノ井地区住民自治協議会の、町田ワーカーを訪ね、子ども支援を通じた地域づくりを目的に連携を図ろうということになった。

また、長野市教育委員会の学校地域連携推進ディレクターである島田様に協力いただき、地域の校長先生との情報交換を重ねたところ、「学校は学習だけではなくて、日常生活のあらゆるシーンで地域の人々の力、シニアの力を求めている」ということがわかった。また、地域の人々は、学校や子どものサポートをきっかけに、世代や立場を超えてつながりたいという願いあるということも分かってきた。

このような検討から、双方がよりよい関係をつくるきっかけにと考えたのが、この3回連続の講座である。講座はただ学習という形で終わらせるのではなくて、学んだことを地域で活かし、活動者になってもらう。子どもを中心に置いた地域づくりのウェーブを起こしたいと、町田さんと思いを共有しました。

それゆえに、講座の内容はより具体的で実践的なものにし、「子どもたちのために頑張っていたいただける方の参加をお待ちしています」という呼びかけに、20名定員のところ32名という多くの方に応募いただき、そのほとんどはシニア世代の方です。

本日は初回の講座を担当いただいた、北信教育事務所生涯学習課の西澤指導主事と受講者を代表して高野さん、荒井さんにもお越しいただいた。

西澤先生からは、子どもたちや学校は今どんな課題を抱えているのか、応援ボランティアには具体的にどんなことが求められているのか、県内の取組事例や子どもカフェについても紹介いただいた。その話から、受講者は、自分たちの活動イメージを膨らませ、具体的に何ができそうかを書き出し見える化した。一緒に掃除をする、畑をつくる、給食のサポート、九九の聞き取り役、宿題の丸つけと褒め係、一緒に遊ぶなど、受講者同士で思いを共有した。

2回目は通明小学校に依頼し、実際の教室で開講した。今日は同校の芳原校長先生にもお越しいただいた。この回は、昔の自分を回想することで、子どもの気持ちに寄り添える活動者になっていただくことが、講座の狙いだった。

あやとり、おはじき、メンコにけん玉といった昔遊びを体験し、今でもやはりシニアの皆さんは、体が覚えている。グループワークから、「昔の遊びのよさを今の子どもたちにも伝えたい」と、受講者の気持ちも高まった。

3回目の講座は、シニアの先輩ボランティアから、子どもたちとの楽しい時間を持ち方ということで講座を開いていただいた。ぬくもりのある、さまざまな手づくりのおもちゃをとおして、子どもと同じ目線に立ち、一緒に楽しむことが大事だということを先輩から教わった。

また、受講者からは、学校以外での活動にも関心があるとの話が出てきたので、児童館や子どもカフェで活動できる機関を紹介したり、相談窓口の一覧表もお配りした。これは、当初予定していなかったが、受講者の反応を見ながら柔軟に対応できたことも、講座の成功につながったと思う。

特に私が日ごろから感じているのは、シニア世代の皆さんが活動を始めるには、その背中をちょっと押し、寄り添い、ちょっと手伝う役割の必要性です。シニアの皆さんは「年だから」と言いがちだが、「年を重ねたシニアのあなただからこそお願いしたいことがある」と、その出番の先へ気持ちを寄せるためのお手伝いです。今回はこの役を町田ワーカーが買って出てくれた。その結果、多くの方が受講後に既に活動を始めている。

受講者には、名前入りの修了書を授与した。裏には応援ボランティアの心得を載せ、いつでも活動できるようにという願いも込めた。

これからの課題は、活動を始めるためのきっかけの場づくりをぜひ各地でも行っていただきたいこと。そのため事例としてこの講座を紹介することで、シニアの社会参加を推進したい。今回は子ども支援というテーマであるが、これに限ったことではない。

また、今回の講座を機に、子ども支援活動を始めた方々が、今度は中心となって持続可能な子ども応援の仕組みをぜひ作っていただきたい。

## ○内山理事長

北信教育事務所の西澤指導主事は、一番初めの導入として、どんなふう to 皆さんの気持ちをそちらへ向けていったか。

## ○北信教育事務所生涯学習課指導主事 西澤慎治さん（以下「西澤慎治さん」）

地域の皆さんにとって、「学校は敷居が高い」というのが一番課題になっていたので、私のほうからは、そんなに身構えるのではなくて、子どもの活動と一緒に寄り添ってもらって、見守ってもらって一緒に楽しんでもらうことが何よりだということを伝えた。

○内山理事長

参加した方も一緒に楽しめるような。

○西澤慎治さん

そうですね。学校もそこを一番求めていますので。

○内山理事長

ありがとうございます。それで町田さんは地域福祉ワーカーさんでいらっしゃるんですが、この講座をどう組み立て、実際どうであったか、ちょっとお教えいただけますか。

○篠ノ井地区住民自治協議会地域福祉ワーカー 町田美紀さん

組み立ては齋藤コーディネーターと相談しながら、学校で何を求めている、皆さんがどういうことができるのかを具体化して、実際の活動にすぐつなげられる内容にしたいと考えた。

○内山理事長

まずはニーズを把握する。そしてシニアの世代、住民が、何ができるかということを明確にしたということですね。

そして、これを受講された高野さんと荒井さん。受講されてどうでしたか。

○子育て応援ボランティア講座受講者 高野弥栄子さん

子どもたちは、言いたいけれども言えないことがたくさんある。先生に言えなくても、地域のおじいちゃん、おばあちゃんたちに、「私、こうだったんだよ」と素直に話せるような子どもになってほしい。

受講していくうちに、子どもたちの目線に立ってあげることがいかに大事なことかが分かってきた。それは若いお母さんたちは忙しくてできないことでも、私たちがみたいに、ひと世代終わって、おじいちゃん、おばあちゃんになってくると少し余裕ができて、子どもたちに目を向けてあげる、子どもの目線よりももっと低くなってあげられることもできる。共に学ぶ方々にそう考える人がたくさんいたので、皆さんと一緒にこれからも活動できている。

○内山理事長

荒井さんはいかがですか。

○子育て応援ボランティア講座受講者 荒井倫子さん

私は通明小学校の隣に住んでいる。孫が通っているときに祖父母の見守り隊というのができて、それに参加し、ずっと続けて10年ほどになる。

近くに信号があり、地区の児童・生徒が100人ほど通る。そこで朝いつも見守りをして、「おはよう」とあいさつする。帰りも家の前を通るので、「おかえり」と声かけしている。登校時は、子どもたちがだんだんあいさつも返さなくなっているように感じる。学校へ行くことに一生懸命なのか、行くのが嫌な

のか。ただ、帰りは元気に「おばちゃん」と返してくれる。

篠ノ井地区では、毎月11日に区長さん他いろいろな方が出て、あいさつ運動をやっているが、子どもたちは全く素通りです。これは家庭環境も影響しているのではないか。親がいつも忙しすぎて、あいさつを教えていないのかなと。そういうことがとても社会的に心配です。やっぱりあいさつは大事ですから。

だから、今、学校でどういふふうに指導されているのかと関心があり、そんなときにこの講座があることを知り、学校の様子が見えたらいいと思い、大した協力はできないが参加することにした。

#### ○内山理事長

ありがとうございます。先ほどの齋藤コーディネーターの話の中で、今回の講座を受け入れた通明小学校の芳原先生、会場にいらしていますか。

どうですか、地域の皆さんを受け入れて。学校の雰囲気は変わりましたか。

#### ○長野市立通明小学校 芳原校長先生

見守り隊の皆さんが朝、「おはようございます」と声をかけてくださったり、ボランティアで書道の指導をしてもらったり、地域の様々な方が学校に入ってくださると、子どもたちが見せる顔は、普通の授業とは違うなと感じる。教えてもらったり、お話できることをすごく楽しみにしている。

#### ○内山理事長

なるほど、お互いにね。はい、ありがとうございます。

齋藤コーディネーター、今後の課題にどうつなぐのかということですが。

#### ○齋藤コーディネーター

つなぐということは、丁寧さというのが必要になってくる。今回は町田さんと連携できたところが一番大きかったと思う。町田さんには、受講者が実際に活動につながるよう、学校やこどもカフェ等とのコーディネートしていただいた。そういうつなぎ役、背中を押す役、行動に移してもらうために寄り添う役というのが必要になってくると思う。

#### ○内山理事長

多様な人たちがかかわって、子どもの応援ボランティアが形作られている。その辺がとても評価できるところだと思います。どうもありがとうございました。

## テーマ③ コミュニティFMを活用した人生二毛作の取組発信（安曇野市）

### ○内山理事長

3つ目のテーマについて、大塚コーディネーター、あづみ野エフエムパーソナリティの中柴香苗さん、番組に出演された川中島の保健室の白澤さん、同じく昭和100年の会の岸田さんですね。よろしくお願いたします。

### ○大塚佳織シニア活動推進コーディネーター（以下「大塚コーディネーター」）

それでは、私から概要をご説明します。皆さんのお手元に人生二モウサク劇場の冊子を資料としておつけしております。

これは昨年の3月、私たちコーディネーター6人が、全県のシニアの活動事例を持ち寄って作成した冊子です。コーディネーターの視点からコメントをつけ、趣味、特技、キャリア、場所、つながりをつくるというカテゴリ別で、シニアの皆さんの活動を紹介した冊子になっている。

この冊子を作った目的は、「こんな活動だったら自分もできるかな」、「こんなところがあるんだったら行ってみたい」という、シニアの皆さんの活動のきっかけづくりとして、手に取ってもらいたいということであり、シニア大学の皆さんには全員お配りし、社協、関係団体にも幅広く配布した。

更に幅広く伝えることを考える中で、地域の方々の情報や人を紹介する番組「中柴香苗の「水色の時間（とき）～あなたをもっと知りたくて～」」を放送するコミュニティFM、あづみ野エフエムを知った。

ここでは、H25年頃から松本地域振興局など県の現地機関の職員が毎月出演し、県の事業紹介をするコーナーがある。人生二毛作のシニアの皆さんの活動紹介やその活動への思いを、直接ご本人に語ってもらいたいと考え、あづみ野エフエムさんに提案した。

シニアの皆さんにとっては、スタジオでヘッドフォンをつけて、自分の思いを、自分の言葉で話すという貴重な経験であった。私も収録に立会い、人生二モウサク劇場で取材した以外のお話や背景を聞くことができ、大変ありがたかった。

こちらにおいでになっている、昭和100年の会の岸田さんの収録では、持ち込みで蓄音機の音を聞かせていただいたり、11月の白澤さん収録でも、様々な活動の紹介や来年の告知をされた。

最後、12月には、そもそもこの人生二モウサク劇場を作った経緯を、当センターの戸田主任コーディネーターが出演して話し、市町村社協等から、講習会の研修資料に使用したいといった反響も出てきている。

今日、収録の様様を持ってきていますので、ちょっと聞いていただければと思います。

（放送の一部を会場で試聴）

このように「人生二モウサク劇場、何ページのこの方です」とはっきり伝え、人生二毛作ラジオとして定着させようというふう考えた。

### ○内山理事長

中柴さん、この提案を受けたときにはどんなふうに思いましたか。

○あづみ野エフエムパーソナリティ 中柴香苗さん

そうですね。私の番組がそもそも、様々な大切な情報をお届けするのはもちろんですが、一番は人の魅力をお伝えしたいということがあります。いろいろな方の熱い思い、そして素敵な人柄をお伝えしたかった。そのとき、たまたま大塚さんからこのお話をいただいて、こちらの狙いと本当にマッチして、こちらからお願いをしたい位の思いだった。

○川中島の保健室 白澤章子さん（以下「白澤章子さん」）

中柴さんの引き出し方がお上手で、やっぱりプロですね。あつという間に時間が過ぎたなという感じでした。

私は（まちの）保健室をやっているが、子どもの問題で親御さんからいろいろ悩み相談を受けている。その中に性の問題が多いということを感じていて、放送の近日中に研修会があったのですが、内容的に話してよいか迷っていました。

安曇野の隣、松本での研修会だったわけですが、中柴さんに引き出していただき、その研修会の告知ができたんです。私たちは、こういった発信ができたので、すごくありがたかった。

○内山理事長

そうすると、やっぱり発信しただけのことはありましたか。

○白澤章子さん

「ラジオを聴いて研修会に来た」という人はいなかったが、デリケートで一步引いてしまいがちな性の問題はとても大事なんだということ、多くの方に聞いてもらえたことで、一步一步になると思っている。

○内山理事長

我々も、この人生ニモウサク劇場をいかに多くの人に発信して読んでいただくかに、とても頭を悩ませている。こういうコミュニティFMというメディアで発信するという方法もあるんですね。とてもいいことだと。

昭和100年の会の岸田さん、わざわざ蓄音機を持ち込んでということで、どうでした、出演して。

○昭和100年の会 岸田正則さん

私どもも自分の声が電波に乗るというのは、まずないことですし、それと同時に、私どもが活動しているのは、長野市近郊しかなかったんです。今回、FMの電波で飛ばしていただいて、これがどこまで届いているかなと。近隣だけではなくて、やはり長野県、それから全国、地球の裏側までこの名前が知りわたればいいなと思っているので、やはりメディアの力というのは非常に素晴らしいと思っている。

○内山理事長

ありがとうございます。大塚さん、この企画の感触は。

○大塚コーディネーター

大きなマスメディアだけが広報のツールではないと考える中で、一石は投じたと思っている。今のラジオは、一方的に聴くだけではなく、SNS等双方向のメディアになっている。また、YouTube等により、こういった録音を後から聞けるような仕組みを作って、ホームページでシェアするなど考えていければよい。

また、シニアの方々向けに、そのラジオを聞いたり、SNSを活用したりするための講習会といったことも企画できるのではないかな。

○内山理事長

せっかくですから戸田主任コーディネーターはいますか。はい、前のほうへちよつと。

人生ニモウサク劇場をどのように皆さんに活用していただけたらいいかな。

○戸田千登美主任シニア活動推進コーディネーター

お手元にあります人生ニモウサク劇場、県内事例がたくさん載っている。単に事柄だけでなく、やっている方の思いとかストーリーに視点を置いて、各コーディネーターが記事を書いている。是非地域活動の参考にさせていただくとか、実際のシニアの活動を視察していただく等活用願いたい。

また、20人ぐらいで民生委員の研修をしたいとか、介護保険制度の総合事業の研修をしたいというような場合は、コーディネーターに連絡をしていただければ手配できるので、是非活用していただきたい。

○内山理事長

ありがとうございます。ということで、人生ニモウサク劇場を大いに活用していただければと思います。発表者の皆さん、ありがとうございました。